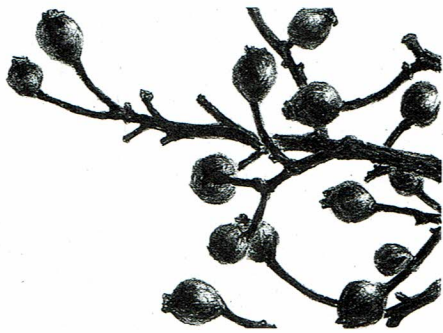


朝日 俳壇 歌壇



〈ノイバラⅢ〉 日高理恵子

◆大串 章選

- 露の世やその一滴が吾なりし
 (筑紫野市) 二宮 正博
 片時雨父百歳の車椅子
 (横浜市) 詫摩 啓輔
 秋行くや遺影の笑みの姿りなく
 (伊勢原市) 大津 朗
 独り聴く旅の駅舎の秋の声
 (柏市) 藤嶋 務
 一茶急や貧を染しむ心あり
 (香川県琴平町) 三宅久美子
 秋の夜人の住む島住まぬ島
 (東かがわ市) 桑島 正樹
 自転車補助輪外す七五三
 (市川市) そがはまなぶ
 磨道をただ秋風行くばかり
 (東京都) 吉竹 純
 秋夕焼街の銭湯ひとつ消ゆ
 (大和市) 荒井 修
 単線の明治の駅舎虎落雷
 (平塚市) 日下 光代

【評】第1句。露のようにはないこの世ではあるが、その「一滴」の「吾」を大事に人生を全うする。第2句。父上は百歳、母上は？ 晴雨を表す言葉「片時雨」がそれを暗示する。第3句。「遺影の笑み」には慰められ励まされる。

◆高山れおな選

- 熊もまた魅せられてはいる秋の山
 (福岡市) 釋 颯
 この星の秋のパンチにをる不思議
 (新潟市) 齋藤 達也
 真夜中の稲架の香を嗅ぐ巡査かな
 (横浜市) 飯島 幹也
 秋の夜は素数のごとく独り居を
 (札幌市) 伊藤 哲
 本能の赴くままに詠みて秋
 (藤沢市) 朝広三雅子
 別の星へ旅をすらすらむ七五三
 (川西市) 糸賀 千代
 並べ干す海女着と産着秋夕焼
 (茅ヶ崎市) 清水 吾舟
 雪虫のころなきこゝろやタイヤ替々
 (札幌市) 堺 隆
 風紋の光散りなほ水澄みぬ
 (淡路市) 川村ひろみ
 夜もすがら目を恥じる文化の日
 (岡崎市) 加藤 幸男

【評】熊出没の句多数。釋さんの作は、熊の内面(?)を想像して自然の神秘に一步踏み込む。齋藤さん。自分かただある事不思議。北原白秋の〈ナニゴトノ不思議ナケレド〉に通じる。飯島さん。この行動もまた少しも不思議でない不思議。

◆小林貴子選

- 時雨虹何しに來たるこの世なる
 (羽咋市) 北野みや子
 自分作カタカナ辞典文化の日
 (福岡市) 藤掛 博子
 龍安寺石それぞれの秋思かな
 (箕面市) 藤堂 俊英
 小夏のもつてのほかに和みけり
 (千葉市) 團野 耕一
 ぱりぱりと紙面折り読む文化の日
 (千葉市) 宮城 治
 亡の穂てかてかしたる油分
 (横浜市) 込宮 正一
 星飛んで聡太に鬼手が降臨す
 (豊前市) 三原 逸郎
 保津川の舟を上がりて新豆腐
 (福知山市) 森井 敏行
 高原の風力計となる世
 (宇佐市) 熊登御堂義昭
 せんべいをパリとハモりて秋惜しむ
 (東京都) 金子 文衛

【評】一句目、何をしに生まれ来てたのか。この冬虹に会うためかも。二句目、新語・外来語の辞典を自作するという前向きな対処法が素晴らしい。三句目は龍安寺の石の配置が鮮やかに目に浮かぶ。四句目のもつてのほかは食用菊、秋の季節語。

◆長谷川權選

- 皮に骨浮かべて走る狐かな
 (朝倉市) 深町 明
 一病に守らるる身の温め酒
 (伊万里市) 田中 南嶽
 五井の浜海苔が干されて小六月
 (東京都) 松木 長勝
 故郷の孤島よろしき根約かな
 (長崎県小値賀町) 中上庄一郎
 通はねば産る生家や草の花
 (高知市) 和田 和子
 戦争の愚に気づかざる寒さかな
 (八王子市) 徳永 松雄
 眼前の山より冬となりけり
 (長野市) 縣 展子
 汚れたたましいの如冬入日
 (取手市) うらのなつめ
 虫の闇人間の闇なお暗し
 (筑紫野市) 二宮 正博
 床や瓦礫の下にぬいぐるみ
 (高槻市) 若林眞一郎

【評】一席。瘦せた狐のしたたかな描写。みごとに彫刻のような。二席。病に守られているという感覚。必ずしも悪いものではない。三席。千葉県の東京湾岸五井の浜。今も干し海苔が風にそよぐ。十句目。戦火のガザ。子どものいた痕跡。

短歌時評 「推し」を詠む

小島 なお

オタクは必ず短歌がうまくなりませう。必ずです。私が保証します。

榊原絃著「推し短歌入門」(左右社)の帯に力強くその書かれている。推しへの気持ちやフックに短歌を作ってみようという今までのないコンセプトの短歌入門書である。「推し」は、漫画・ゲームのキャラクター、アイドルなどに用いられ、強い支持や憧れの気持ちに伴う表現。なぜオタクと短歌の相性がいいのか。その理由について、「推し」の発する

「一字一単語で大騒ぎするところまで、『推し』が笑ったり、あるいは黙り込んだりするだけで心が震える」感受性を備えているからだと言書は説明する。「……Aもそんなこと言っただね」という台詞をBが言ったとき、「も」の文字にはA以外の誰かの存在が意識されつつある。「他に誰を想像しているの?」と場面の背後の物語を敏感に想像する力は、てにをばを重要視する短歌としか

短歌入門書としての基礎もしっかり押さえてある。「推し短歌三原則」の一項目は「原作を知らない人が読んでも短歌としてよいものを作る」。祝福を 花野にいとということとは去るときすらも花を踏むこと 漫画「ゴールデンカムイ」の尾形百之助のこの歌を詠んだ歌だという。けれど、漫画を知らなくても、祝福のあかるさと、そのために花の命を犠牲にするこの暗さの矛盾を味わうことができる。自分の「好き」をもっと丁寧に、自分の言葉で慈しまたい多くの人のための一冊だ。(歌人)

小澤實句集「澤」 第4句集。表題は、著者が主宰する俳誌名に拠る。「さざなみにさざなみあらた花待てる」「翁に問ふプルトリウムは花なるやと」(角川書店・2970円) 堀本裕樹著「才人と俳人」副題は「俳句交換句ッ記」。俳壇の小林聡美さんや芸人で作家の又吉直樹さんら28人と著者による、俳句とエッセーの往復書簡。(集英社・1650円)

風信

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。